

(1) 宮崎県感染症発生動向調査概況 —2023 年/令和 5 年—

宮崎県衛生環境研究所

【目 次】

1 全数把握対象疾患	
(1) 2023 年に報告された疾患とその報告数	2
(2) 主な全数把握対象疾患の概要	3
(ア) 結核	
(イ) 腸管出血性大腸菌感染症	
(ウ) 重症熱性血小板減少症候群	
(エ) 梅毒	
2 定点把握対象疾患	5
(1) インフルエンザ	
(2) 新型コロナウイルス感染症	
(3) 小児科対象疾患	
(ア) 前年との比較	
(イ) 例年との比較	
(ウ) 全国との比較	
(エ) 注目すべき疾患	
a) 咽頭結膜熱	
b) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	
c) ヘルパンギーナ	
(4) 眼科及び基幹定点対象疾患	10
(ア) 眼科定点対象疾患	
(イ) 基幹定点対象疾患	
(5) 月報告定点把握対象疾患	10
(ア) 性感染症	
(イ) 薬剤耐性菌感染症	

1 全数把握対象疾患

(1) 2023年に報告された疾患とその報告数を表1に示す。

表1 2023年に報告された全数把握対象疾患の推移—2019～2023—

分類	疾病名	2023年※	2022年	2021年	2020年	2019年
2類感染症	結核	106	123	130	152	194
		14,694	14,798	16,299	17,786	21,672
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	27	66	29	23	42
		3,811	3,370	3,243	3,094	3,744
	腸チフス	1	－	－	－	1
		38	16	4	21	37
4類感染症	E型肝炎	1	2	5	3	1
		552	435	460	454	493
	重症熱性血小板減少症候群	12	10	13	5	8
		133	118	110	78	101
	つつが虫病	32	41	72	57	43
		434	492	544	538	404
	日本紅斑熱	14	12	19	13	8
		501	457	490	422	318
レジオネラ症	9	5	13	9	8	
	2,271	2,143	2,133	2,059	2,316	
	レプトスピラ症	2	3	－	1	－
		49	38	34	17	32
5類感染症	アメーバ赤痢	4	2	3	8	4
		485	533	537	611	853
	ウイルス性肝炎	7	6	4	6	4
		242	211	203	246	331
	カルバペネム耐性腸内細菌感染症	3	9	5	3	14
		2,092	2,015	2,066	1,956	2,333
	急性弛緩性麻痺	1	1	－	－	1
		56	41	25	34	78
	急性脳炎	4	3	－	4	3
		643	399	338	491	959
	クロイツフェルト・ヤコブ病	4	1	1	3	1
		167	172	179	157	193
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	6	3	5	6	11
		941	708	622	718	894
	後天性免疫不全症候群	5	4	5	5	5
		943	893	1,053	1,094	1,231
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	3	2	4	2	1
		559	211	194	253	543
	侵襲性肺炎球菌感染症	15	10	7	10	12
		1,959	1,347	1,405	1,655	3,344
	水痘(入院例)	4	4	4	9	1
		400	327	301	362	492
	梅毒	175	116	89	40	23
		14,906	13,221	7,978	5,867	6,642
	播種性クリプトコックス症	5	6	4	2	2
		171	159	163	152	156
破傷風	2	5	7	5	3	
	109	96	93	104	126	
百日咳	5	15	2	37	304	
	1,009	491	707	2,819	16,845	

上段: 県内の報告数

下段: 全国の報告数

※ 2023年の全国報告数については速報値

(2) 主な全数把握対象疾患の概要

(ア) 結核

報告総数は 106 例で、保健所別報告数を図 1-1、1-2 に示す。患者が 66 例、疑似症患者が 2 例、無症状病原体保有者が 38 例で、患者は肺結核が 42 例、肺結核及びその他の結核が 2 例、その他の結核（結核性胸膜炎、結核性リンパ節炎など）が 22 例であった（図 1-3）。男性が 54 例、女性が 52 例で、年齢群別報告数の割合を図 1-4 に示す。70 歳以上が全体の約 7 割を占めている。

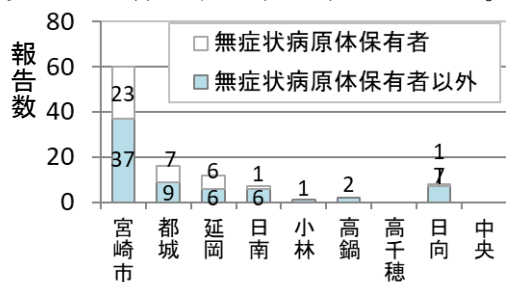


図 1-1 保健所別報告数
(2023 年結核)

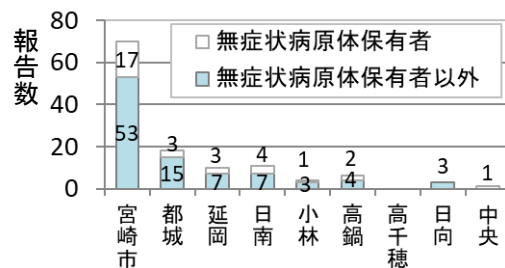


図 1-2 保健所別報告数
(2022 年結核)

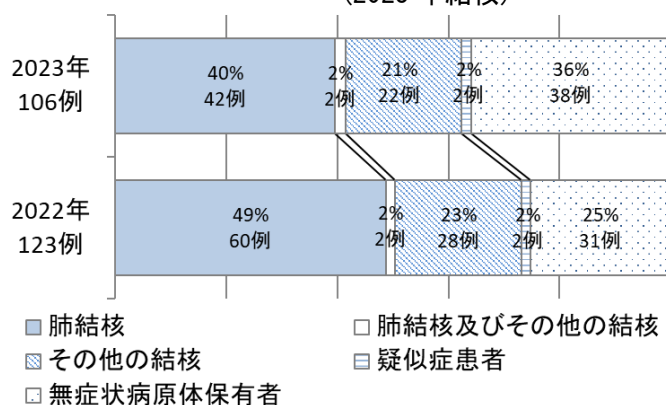


図 1-3 病型別報告数の割合 (結核)

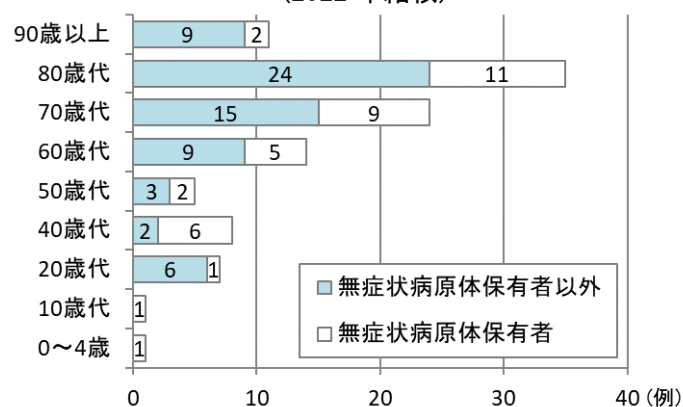


図 1-4 年齢群別報告数 (結核)

(イ) 腸管出血性大腸菌感染症

報告総数は 27 例で、保健所別報告数を図 2-1、月別報告数を図 2-2 に示す。患者発生時期は 11 月が 9 例と全体の約 3 割を占めた。患者が 15 例（HUS 発症例なし）、無症状病原体保有者が 12 例（図 2-3）で、O 血清型別報告数を表 2 に示す。年齢群別では 0～4 歳が全体の約 3 割を占めている（図 2-4）。

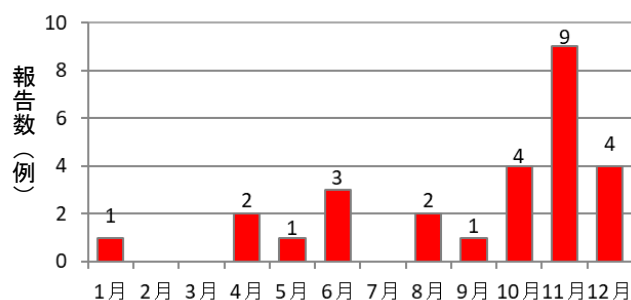


図 2-2 月別報告数
(腸管出血性大腸菌感染症)

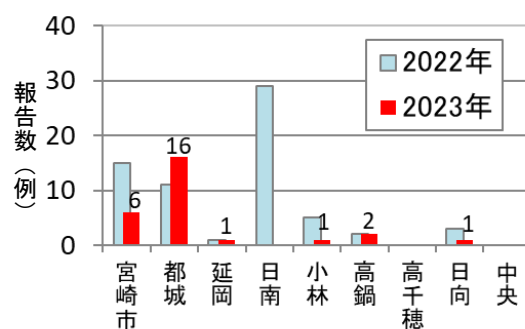


図 2-1 保健所別報告数
(腸管出血性大腸菌感染症)

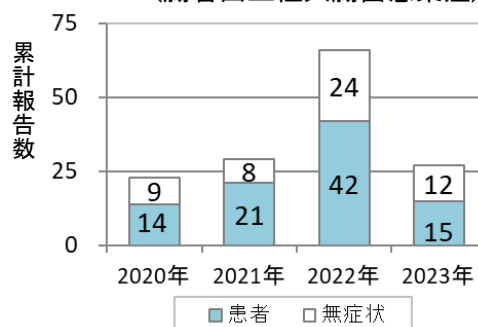


図 2-3 病型別報告数の推移
(2020 年～2023 年)

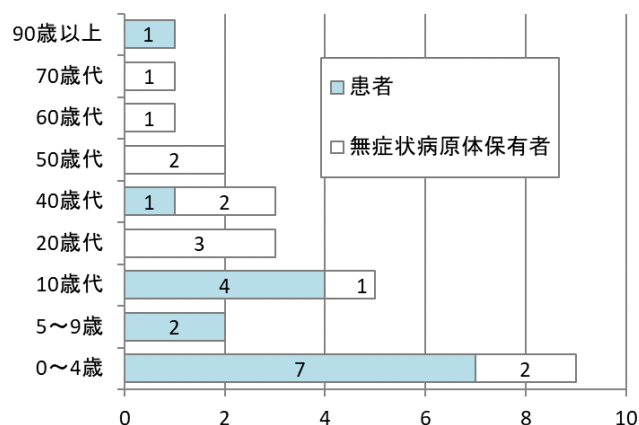


図 2-4 年齢群別報告数
(腸管出血性大腸菌感染症)

(ウ) 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)

報告総数は 12 例で、宮崎市 (6 例)、高千穂、日向 (各 2 例)、日南、高鍋 (各 1 例) 保健所管内から報告された。届出が開始された 2013 年 3 月からの患者の月別発症者数を図 3、年齢群別報告数を表 3 に示す。

表 3 年齢群別報告数 (SFTS) (n=109)

20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代
1	1	2	5	26	41	27	6

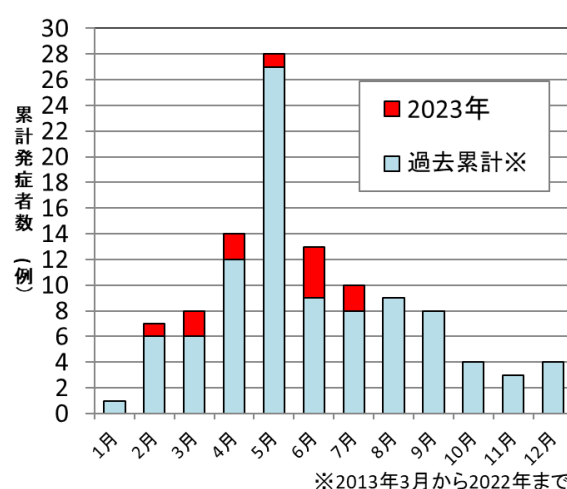


図 3 月別発症者数 (SFTS)
(2013 年 3 月～2023 年 12 月 n=109)

(エ) 梅毒

報告総数は 175 例で、宮崎市 (111 例)、都城 (36 例)、延岡 (18 例)、日向 (4 例)、日南、小林、高鍋 (2 例) 保健所管内から報告された。男性が 103 例、女性が 72 例で、年齢群別報告数を図 4-1、類型別報告数の推移を図 4-2 に示す。患者のうち、早期顕症梅毒 (I 期) が 69 例、早期顕症梅毒 (II 期) が 54 例、晩期顕症梅毒が 2 例、無症状病原体保有者が 50 例であった。感染経路は、異性間性的接触 113 例、同性間性的接触 21 例、性的接触 (異性間同性間不明) 24 例、不明 17 例であった。

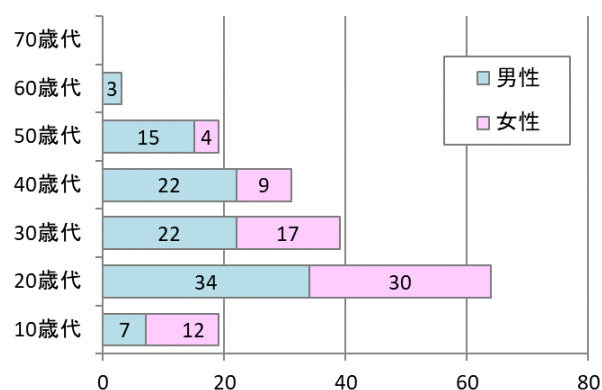


図 4-1 年齢群別報告数 (梅毒)

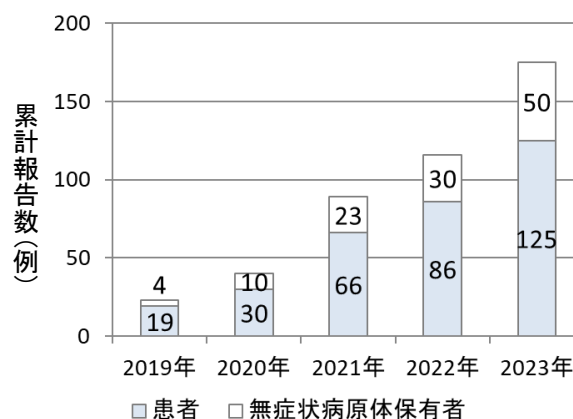


図 4-2 類型別報告数の推移 (梅毒)

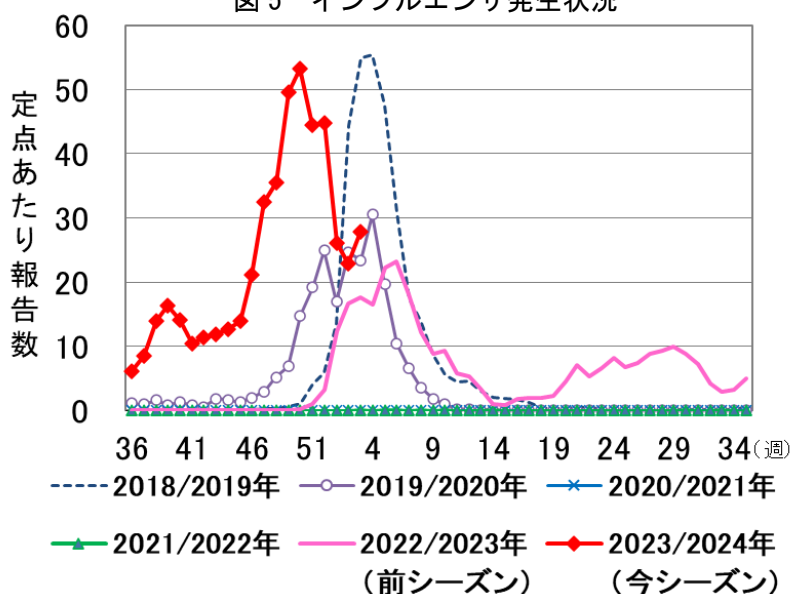
2 定点把握对象疾患

(1) インフルエンザ

2023 年のインフルエンザの報告数を、前年（2022 年）、過去 5 年間の平均（以下「例年」という）及び全国と比較した。報告総数は 39,771 人（定点あたり 685.7）で、定点当たり報告数において、前年(5.0)の約 136.7 倍、例年の約 3.3 倍、全国の約 1.5 倍であった。

なお、インフルエンザシーズンにおける発生状況を図 5 に示す。2023/24 シーズン（今シーズン）は、2023 年 38 週（9 月 18 日～9 月 24 日）に定点当たり報告数が 14.0 となり流行注意報を超え、次いで 2023 年 47 週（11 月 20 日～11 月 26 日）に定点当たり報告数が 32.5 となり警報値を超えた。定点当たりの報告数が警報値を超えたのは、2020 年第 4 週（定点あたり 30.6）以来となった。

図5 インフルエンザ発生状況



(2) 新型コロナウイルス感染症

2023年第19週より新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行した。第19週から第52週までの報告総数は18,553人（定点あたり319.9）で、定点当たり報告数において、全国の約1.2倍であった。

発生状況を図 6-1、保健所別報告数を図 6-2 に示す。

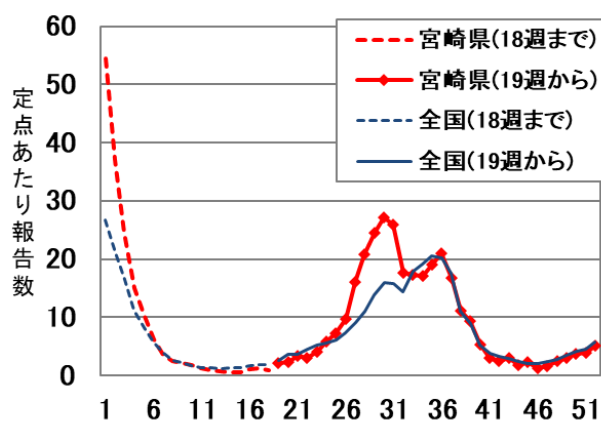


図 6-1 新型コロナウイルス感染症発生状況

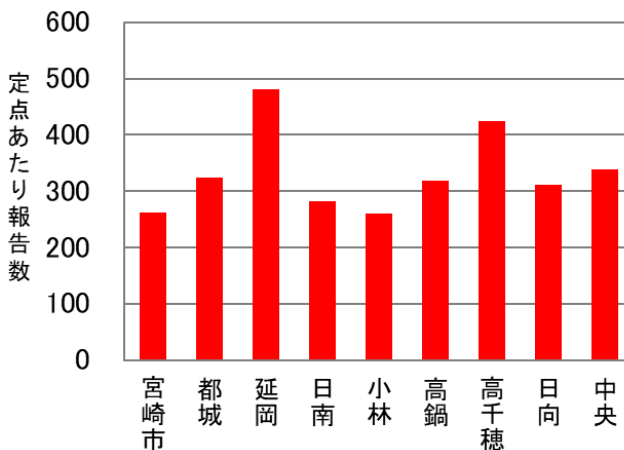


図 6-2 保健所別報告数

(新型コロナウイルス感染症)

(3) 小児科対象疾患

2023 年の小児科対象疾患の報告総数は 29,753 人（定点あたり 826.5）で、定点当たり報告数において、前年の約 1.8 倍、例年の約 1.1 倍、全国の約 1.5 倍であった。

(ア) 前年との比較 (図 7-1)

増加した主な疾患はヘルパンギーナ（16.2 倍）、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎（5.3 倍）、咽頭結膜熱（4.3 倍）で、減少した主な疾患は特になかった。

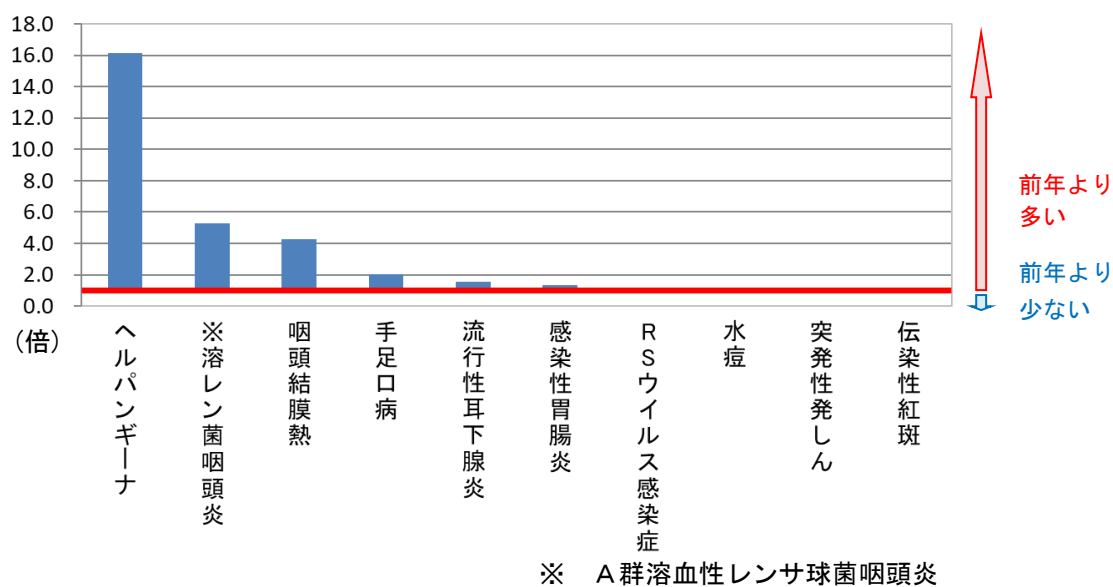


図 7-1 2023 年 前年との比較（小児科定点対象疾患）

(イ) 例年との比較 (図 7-2)

多かった主な疾患はヘルパンギーナ（3.1 倍）、咽頭結膜熱（2.0 倍）で、少なかった主な疾患は伝染性紅斑（約 0.05 倍）、流行性耳下腺炎（約 0.2 倍）、水痘（約 0.4 倍）であった。

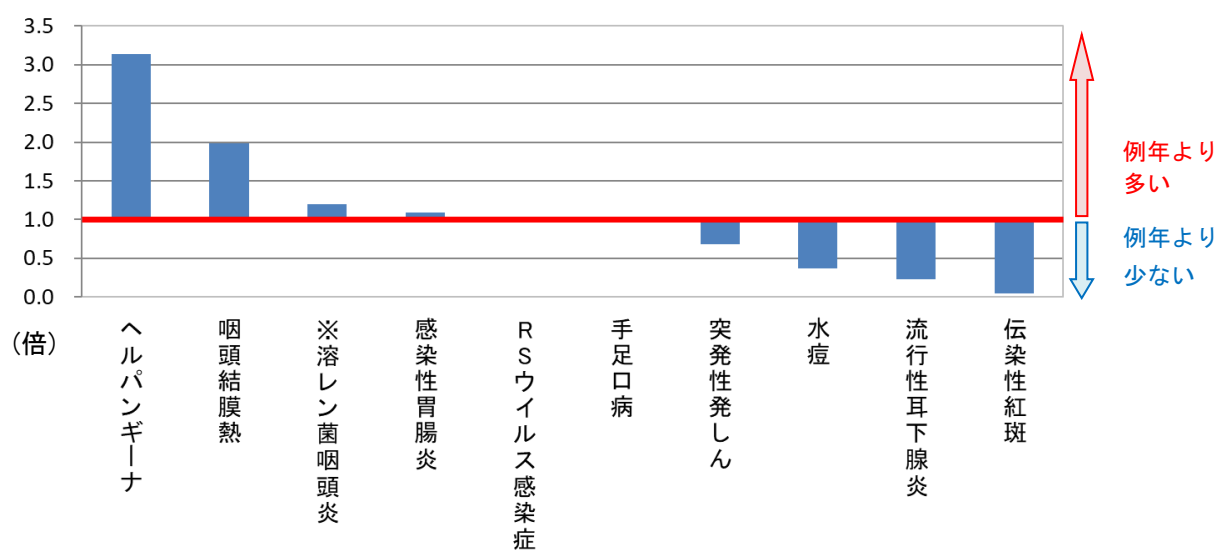


図 7-2 2023 年 例年との比較（小児科対象疾患）

(ウ) 全国との比較 (図 7-3)

多かった主な疾患は手足口病 (約 2.6 倍)、突発性発しん (約 1.9 倍) で、少なかった疾患は伝染性紅斑 (約 0.8 倍) であった。

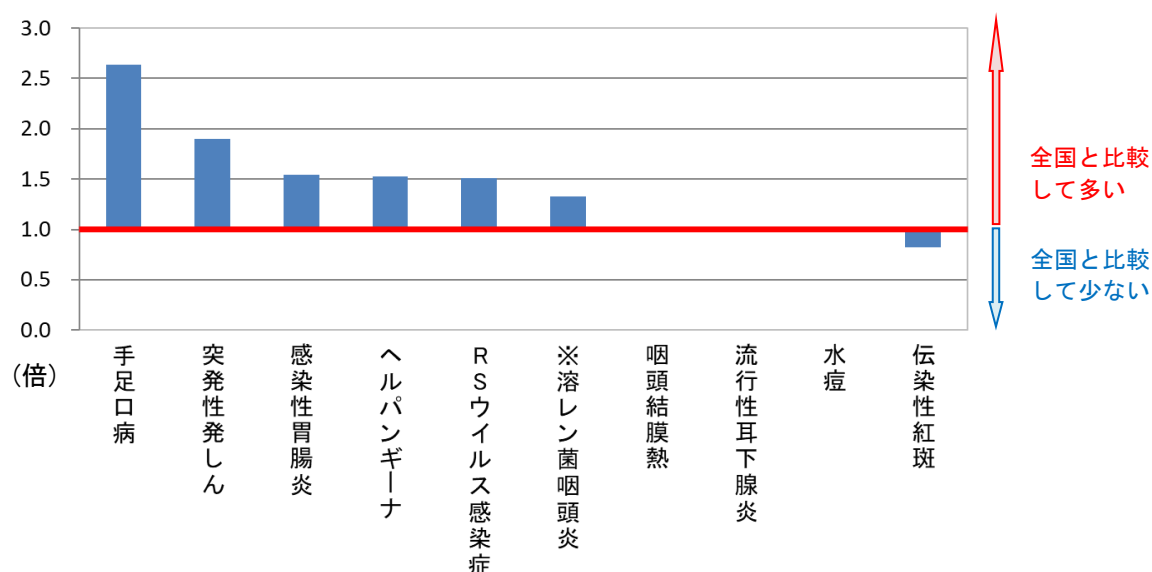


図 7-3 2023 年 全国との比較 (小児科対象疾患)

(エ) 注目すべき疾患

a) 咽頭結膜熱 (図 8-1～4)

咽頭結膜熱の報告総数は 2,107 人 (定点あたり 58.5) で、定点当たり報告数において、前年の約 4.3 倍、例年の約 2.0 倍、全国と同程度であった。発生状況を図 8-1、過去 5 年の定点あたり累積報告数推移を図 8-2、保健所別報告数を図 8-3 に、年齢群別報告数の割合を図 8-4 に示す。

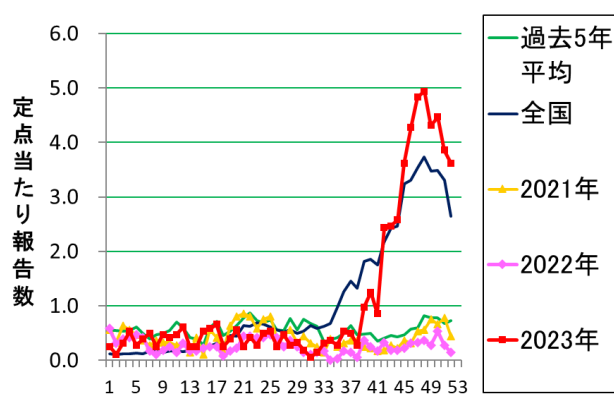


図 8-1 咽頭結膜熱 発生状況

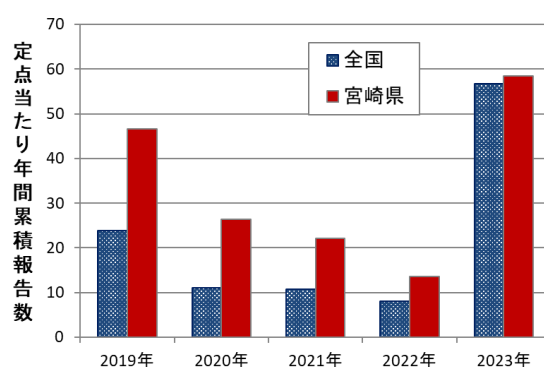


図 8-2 年間累積報告数推移 (咽頭結膜熱)

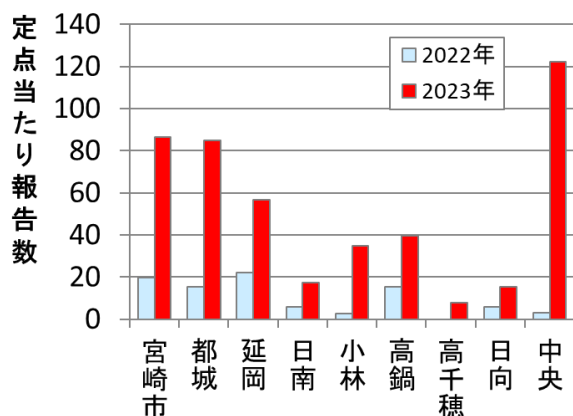


図 8-3 保健所別報告数（咽頭結膜熱）

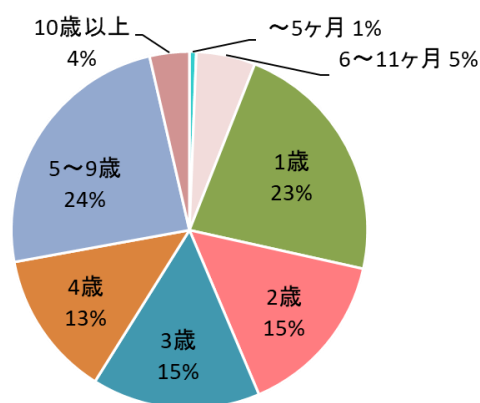


図 8-4 年齢群別報告数の割合（咽頭結膜熱）

b) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎（図 9-1～4）

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の報告総数は4,036人（定点あたり112.1）で、定点あたり報告数において、前年の約5.3倍、例年の約1.2倍、全国の約1.3倍であった。発生状況を図9-1、過去5年の定点あたり累積報告数推移を図9-2、保健所別報告数を図9-3に、年齢群別報告数の割合を図9-4に示す。

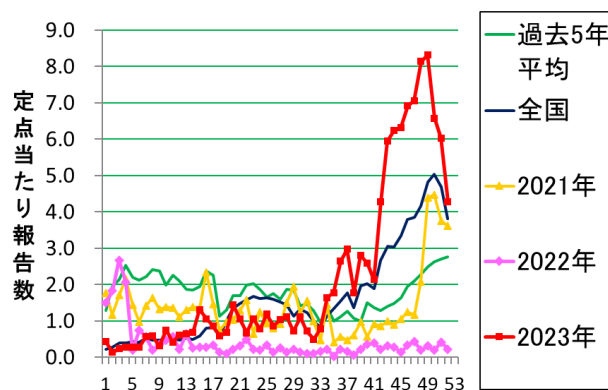


図 9-1 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎発生状況

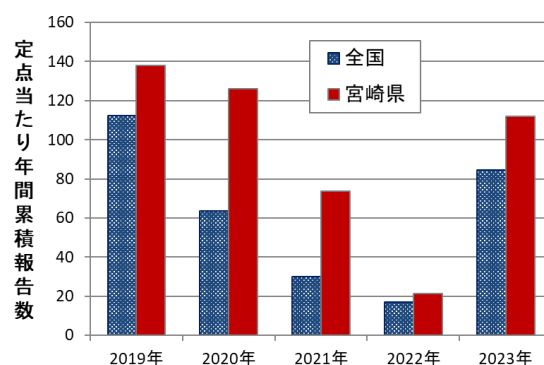


図 9-2 年間累積報告数推移（A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）

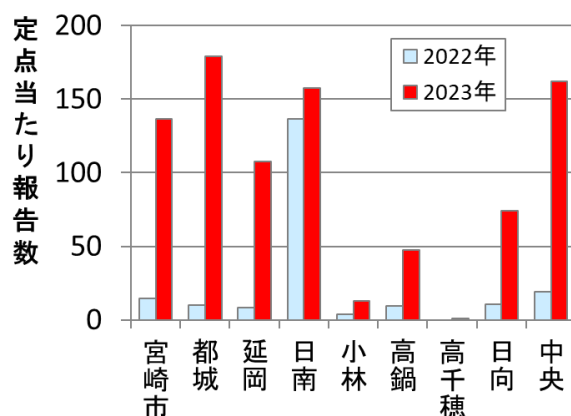


図 9-3 保健所別報告数（A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）

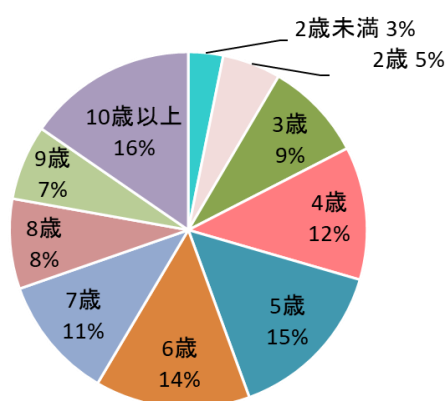


図 9-4 年齢群別報告数の割合（A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）

c) ヘルパンギーナ（図 10-1～4）

ヘルパンギーナの報告総数は 3,409 人（定点あたり 94.7）で、定点当たり報告数において、前年の約 16.2 倍、例年の約 3.1 倍、全国の約 1.5 倍であった。発生状況を図 10-1、過去 5 年の定点あたり累積報告数推移を図 10-2、保健所別報告数を図 10-3 に、年齢群別報告数の割合を図 10-4 に示す。

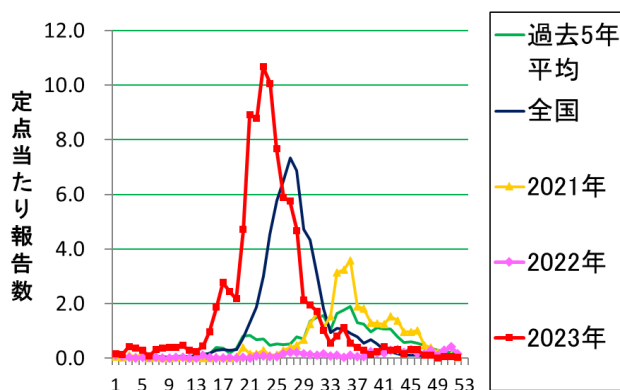
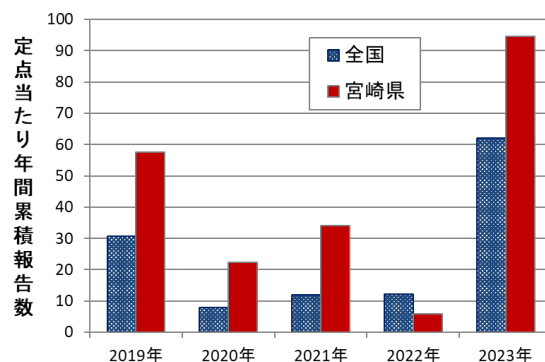
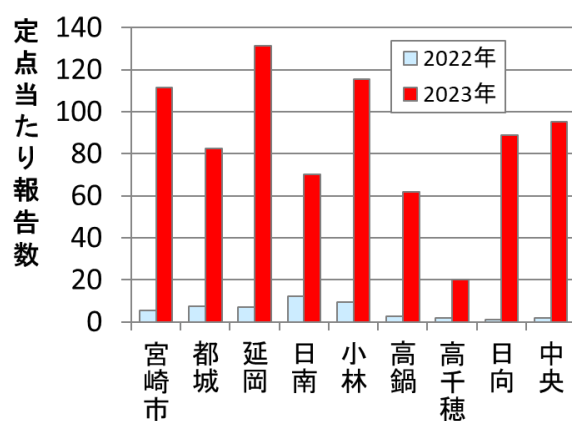
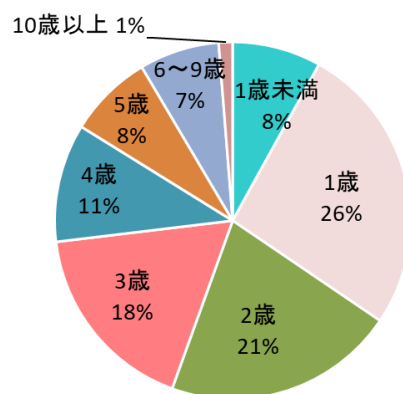


図 10-1 ヘルパンギーナ 発生状況

図 10-2 年間累積報告数推移
（ヘルパンギーナ）図 10-3 保健所別報告数
（ヘルパンギーナ）図 10-4 年齢群別報告数の割合
（ヘルパンギーナ）

(4) 眼科及び基幹定点対象疾患

2023 年の眼科及び基幹定点対象疾患の報告数を、前年、例年及び全国と比較した（図 11）。

(ア) 眼科定点対象疾患

報告総数は 346 人（定点あたり 57.7）で、定点当たり報告数において、前年比 251%、例年比 86%、全国比 215%であった。

(イ) 基幹定点対象疾患

報告総数は 4 人（定点あたり 0.57）で、定点当たり報告数において、前年比 400%、例年比 9%、全国比 12%であった。

(5) 月報告定点把握対象疾患

性感染症と薬剤耐性菌感染症の報告数を前年、例年及び全国と比較した（図 12）。

(ア) 性感染症

報告総数は 477 人（定点あたり 36.7）で、定点当たり報告数において、前年比 108%、例年比 113%、全国比 63%であった。

疾患ごとの性別報告数を図 13-1、年齢群別報告数の割合を図 13-2 に示す。

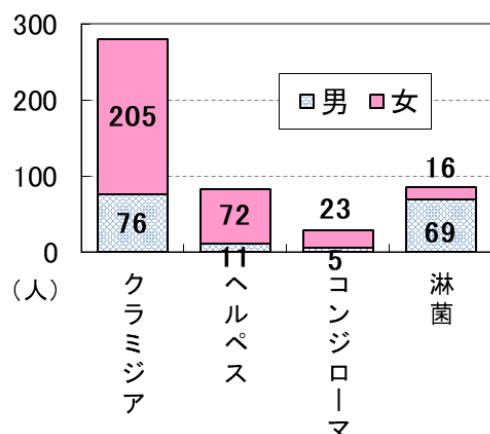


図 13-1 疾患別性別報告数
(性感染症)

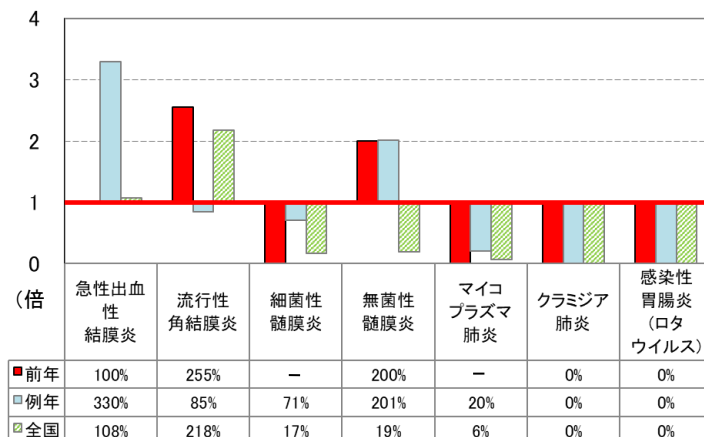


図 11 2023 年 前年、例年及び全国との比較
(眼科及び基幹定点把握対象疾患)

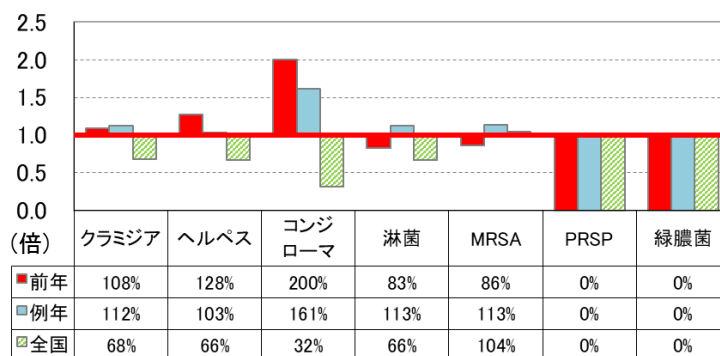


図 12 2023 年 前年、例年及び全国との比較
(性感染症及び薬剤耐性菌感染症)

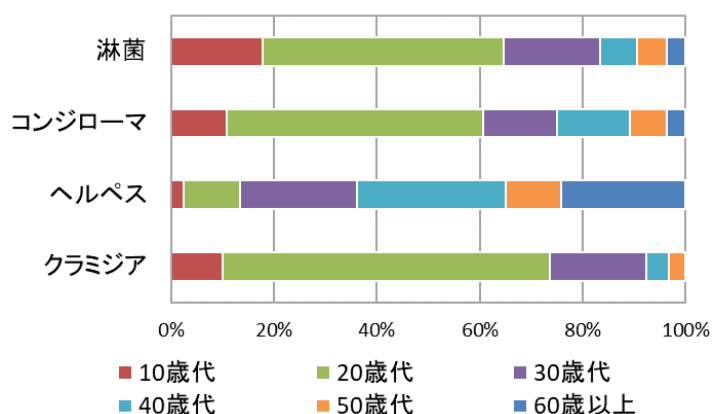


図 13-2 年齢群別報告数の割合
(性感染症)

(イ) 薬剤耐性菌感染症

報告総数は 235 人（定点あたり 33.6）で、定点当たり報告数において、前年比 86%、例年比 111%、全国比 97%であった。年齢別では、MRSA は 70 歳以上が全体の約 7 割を占めた。PRSP 及び薬剤耐性緑膿菌感染症は報告がなかった。